Ⅰ. 実験育児学－Human Biologyの立場から
Ⅱ. 育児に関する意識調査－母性行動について

畠　山　富　而（岩手医大小児科）

実験育児学

仔ザル（カニクイザル）を実験動物として母子早期分離が，種・特異的固定行動型（摂食行動，遊び行動，性行動，養育行動など）に如何なる影響をおよぼすかについて長期的研究を行い，比較動物学的にも，ヒトの母子相互作用の解明への一端を追求している。

現在までの研究結果からの推察では，従来，本能的行動といわれていた種・特異的固定行動型も，単に，生得的（遺伝子）にプログラミングされ，支配されている行動のみでなく，DNA中に準備され，さらに生後の母子相互作用によるシグナルに基き触発され刻印される行動，母親・仲間を通じての模倣学習により作られる行動の総和によることが明かになってきており，それぞれにcritical periodの存在することも明かとなった。しかも，この，種・特異的固定行動型の確立は胎児期，生後の乳幼児期早期にあり，脳DNAの発達，ミエリネーションの発達との相関も推察される結果を得た。

今回は，サルを中心とする"Isolation Monkey"に関する文献的考察を行うと共に，human biologyの立場から育児学の理論的確立を目ざして「実験育児学」メデイサイエンス，1981を出版し，併せて，胎児期・乳幼児期の人生早期の母子相互作用の重要性を指唆した。

育児に関する意識調査
―― 母性行動について

1. 目　的

変貌する社会の中で母性行動もまた変動しているのであろうか。この中では，無意識的母性行動の観察が最も重要であることは論をまたないが，今回は，意識的母性行動が，どのように把握され，如何なる状態に位置づけられ，さらに行われているかを知るために，岩手県の地域社会を背景に，歴代的動態も加えて調査を行った。

2. 調査方法

1）調査地区，①盛岡市新興団地。②田園都市，秋田県鹿角市。③都市近郊A，B，いづれも企業誘地地区に隣接する農村。④農村，A，B。⑤山間村。県内の避村の代表的地域である。（名称上は2市5町である。）

2）調査対象および調査方法

26項目を有するアンケート調査を行った。団地は郵送にて第1子を持つ母親100名に依頼し，回収率62％であった。田園都市は，第1子を持つ母親100名，保育所入所中の幼児を持つ母親186名，各々保健婦の直接面接により100％回収した。都市近郊Aは，20歳代，30歳代，40歳代，50歳代，各々100名を保健婦の協力により100％回収した。なお，20歳代は第1子の母親とした。Bは第1子を持つ母親100名を保健婦の協力を得て回収したが，47％の率であった。農村Aは，保健婦の協力により20歳代，30歳代，40歳代，50歳代，各々100名調査を行ったが回収率100％であった。20歳代は第1子の母親とした。Bは保健婦の協力により第1子を持つ母親100名で100％の回収率であった。山間村は保健婦の個別訪問により第1子を持つ母親112名で100％の回収率であった。調査人員の総合計1307名である。なお，40歳代以上の調査対象は無作意抽出である。調査期間は昭和55年4月～56年10月までである。

3. 調査結果

都市近郊A，農村Aにおいて，年代別調査を行ったが，紙面の都合上，報告は次回にする。なお，結果は，主なる数値のみとする。

調査対象の母親と夫の結婚年齢，調査時点の年齢も問題となるが，大部分は20～30歳代の対象者である。詳細は省略する。

学歴は，短大以上は団地15％が高率であり，高校率は団地55％，田園都市48％，都市近郊A39％，中学卒の多いのは，都市近郊Bの60

%，農村A，Bの５２%，山間村４７%である。（図は，主なるもののみを示す）。

1）結婚前後の子供に対する意識状況

①あなたは結婚する以前，子供が好きか，〔好き〕〔好きでない〕が各地区とも半々であるが，〔好きでない〕は，農村Ｂ６０%，都市近郊A，Ｂ55%，団地５５%であった。②結婚前，早く子供が欲しいと思いましたか，〔欲しい〕団地，田園都市，農村Ａ６０～７０%を示したのに対し〔欲しくない〕都市近郊Ｂ７５%，同じくＡ６０%，農村Ｂ５５%であった。③結婚する時，子どもを自分で育てようと思いましたか，〔自分で〕団地９３%を最高に農村A，Ｂ６５%，山間村，都市近郊Ａ６０%である。〔できるだけ自分で〕都市近郊Ｂ６０%が著明に高率であり，次いで田園都市４５%である。（図３） ④夫は，結婚するとき，結婚したなら早く子供が欲しいと望んだか，〔当分欲しくない〕は都市近郊Ｂ４６%が高率であり，同じくＡ３８%，農村Ｂ３４%であった。⑤同じく，〔あなたは〕の質問に対して，殆んど同じような傾向を示したが，夫の項より〔欲しくない〕が増加の傾向を示し，都市近郊Ｂ６０%を最高に，同じくＡ５１%，農村Ｂ５１%を示した。（図5）⑥$^{-A}$（子供が生まれるまでの期間）は，大部分（７０～８０%）は１～２年以内であったが⑥$^{-B}$〔２年以上の期間のあった理由〕の項では，〔妊娠しない〕は都市近郊A，B，農村Ｂ５０～６５%，受胎調節は団地５０%，農村A，Ｂ３５%代を示した。自然流産は山間村の２５%から都市近郊Ａ１２%の間にあった。人工流産は団地１９%，農村Ａ１７%，都市近郊Ｂ１１%であった。さらに⑦，〔今迄の人工流産の経験〕では，都市近郊A，Ｂ３５%の高率を示し，他地区も山間村７%を除いて２０%代を示していた。

2）妊娠から分娩前後までの意識状況

⑧妊娠を知ったときの気持について，〔うれしかった〕〔うれしくもあったが，とまどった〕団地１００%，山間村９６%，田園都市，農村Ａ９０%であり，他地区も殆んど８０%代を示したが〔別になにも感じなかった〕農村Ｂ２０%，都市近郊Ａ１６%，Ｂ１１%を示した。（図８） ⑨夫に対する同じ質問に対しては，〔非常に喜んだ〕の項が妻の項より各地区とも著増しており，夫と妻の状況の差を示していた。しかし〔喜ばなかった〕山間村１２%，都市近郊A，B，農村B，各１０%が認められた。⑩つわりの軽重では，山間村が〔軽い〕ものの比率がやゝ高い傾向を示した以外，特別地区差を認めなかった。⑪〔お産の状況〕では，各地区とも２０%近くが難産と答えており，手術分娩は団地が他地区の２倍の９%を示していたことが注目された。⑫お産後，また子どもを生みたいか，に対して〔絶対生みたくない〕都市近郊Ｂ４３%を最高に同じくＡ３７%，田園都市３５%，他地区も３０%代を示したが，団地２１%で最低であり，お産の状況とは必ずしも一致しなかった。

3）育児についての意識状況

乳児の栄養法について，出産前後の状況と，その理由を調査した。⑬$^{-A}$出産前〔母乳栄養法で〕の答えが，各地区とも８０%代を示した。とくに山間村，団地，農村A，田園都市は９０%代を示した。その理由については，〔自然だから〕山間村，農村，田園都市が５０%代を示し，〔すべて優れている〕は団地，都市近郊５０%代を示し，その内容にも感染罹患が少いなどの理由があげられていた。その他，〔簡単だから〕の項もあった。お産後の同様の調査，さらに，３ヵ月齢，６ヵ月齢の栄養法の調査では，この母乳栄養法への希望は著明に減じ，３ヵ月齢を例に示すと山間村６５%，団地，田園都市６０%，農村５０%，都市近郊Ａ４３%，Ｂ３８%と地区においては1／2 にも激減していた。⑬$^{-B}$出産前，〔混合栄養法で〕と答えた人は，勤務のための状況が殆んどであり都市近郊A，B，団地，田園都市，農村Aに１５%代示めされていたが，生後３ヵ月齢で見ると都市近郊Ｂ３７%，同じくＡ３２%，農村Ａ．Ｂ30%，団地，田園都市２５%，山間村でも１９%と著明に増加し，とくに都市近郊A，B，中でもB，農村A，Bの〔勤務のため〕が著増していた。⑬$^{-C}$出生前，〔人工栄養法で〕と答えた人は 各地区とも数%であり，殆んどの人は勤めのためと答えていた。しかし，中には，〔ミルクの方がすべて優れているから〕〔美容のため〕との理由も散見された。出生後の人工栄養の増加は，混合栄養法ほどの比率ではないが，〔母乳分泌不良と勤務のため〕を理由に増加し都市近郊A，Ｂ２５%，

農村A，B２０％代，団地２０％弱，田園都市，山間村１５％であった。⑭子供と一緒にいることがたのしいか，〔疲れる〕の質問項目で農村A15％，同じくB，山間村が各１０％を示し他地区はそれ以下であった。⑮子供を生まなければと後悔したことがあるか，都市近郊B３９％，山間村34％の高率であった。Bの理由は，育てるのは大変だし疲れる，わづらわしい，なども見られた。山間村では，多忙で働かなければならず子供と遊んでやることができず可哀相だという理由が大部分であった。（図１５）⑯$^{-A}$子供と一緒に寝ているか，に対しては，いわゆる添寝は山間村７２％，団地２１％，他地区４０～５０％であった。〔別の部屋で〕都市近郊B３８％，同じくA１９％，農村B９％，他地区は１～２％であり，山間村0であった。⑯$^{-B}$寝具については省略，⑯$^{-C}$乳児の睡眠時間について，〔できるだけ寝ていた方がよい〕〔３時間ぐらいで起きてくる方がよい〕を質問したが，前者に対して各地区とも４５％，後者に対して３５％で地域差を認めなかった。⑰母親は育児のために家にいた方がよいか，〔育児のために家にいる〕団地８０％，都市近郊A７４％，田園都市，山間村７０％代であり，最低は都市近郊B４３％で，他地区はその間にあった。〔家にいた方がよいと思うが仕事のためできない〕の都市近郊B５４％の内容は，生活のためは５％であり，他の大部分の就労は，姑との関係，車，テレビ，テープレコーダなどの購入資金のためであった。〔育児のためでなく家にいる〕では育児は祖母が行っており内職，家の労働に従っていた。（図１７）。⑱子供と遊んでいるとき楽しいか，〔疲れる〕が都市近郊，山間村で数％見られたが，〔たいへんたのしい〕など地区差を認めなかった。⑲外出するとき子供を一緒するか，〔いつも一緒に連れてゆく〕が各地区殆んどであるが，〔みてくれる人に頼んでゆく〕〔子供を一人にして出かけることもある〕は都市近郊B３０％，同じくA１７％見られた。他地区５％代であった。⑳子どものおやつを自分で作りますか，〔大部分，全部自分で〕団地，山間村，農村A，Bが高率であり，加工品，インスタント類の使用は都市近郊B，次いで同じくA，田園都市で高率であった。㉑衣服類についての同じ質問に対しては，〔自分の手で作ったもの〕山間村５５％，既製品が多いのは農村A６７％，都市近郊B５７％が目立ち，他地区は両者半々の状態であった。㉒子供の食器についての質問であるが，地区差がないため省略。㉓育児について夫と相談するか，山間村７０％，団地，田園都市，都市近郊Aは各５０％，〔あまり相談しない〕都市近郊B６７％，農村A，B５５％代を示していた。㉔現在，子供と一緒に遊びますか，〔いつも一緒に遊んでいる〕山間村４１％，団地３４％，農村A３０％，都市近郊A１５％，同じくB５％であり，〔あまり遊ばない〕都市近郊B38％，同じくA16％が顕著であり他は，〔時に遊んでいる〕の内容であった。（図２４）

以上，この調査は，主として岩手県内における地区において，一般的母性行動を中心に調査した結果であるが，それぞれの質問項目に地区差が認められ，各地区とも，それぞれの地域背景，生活環境，とくに経済基盤の変化に伴い母性意識も変化しつゝあることが明かとなった。とくに都市近郊の企業誘地地区においては，従来とは異った母性行動パターンが認められた。この両地区は，県内でも有数の豊かな穀倉地帯であり，若妻が誘地企業にて働かなければならない家庭は５％以下である。それにもかゝわらず共働きで出ており，祖父母が田畑を耕作し，その間に祖母が育児を行っているという実態があり，実際の乳幼児などの健診には，祖母が子供を連れて来る率は８０％にもおよんでいる。

次回に報告する予定の年代的調査からも母性行動（意識的）は変化していることが明かとなっている。今後，この影響が母子相互に如何なる結果をもたらすか，社会適応発達，とくに言語発達を中心に追求してゆきたい。

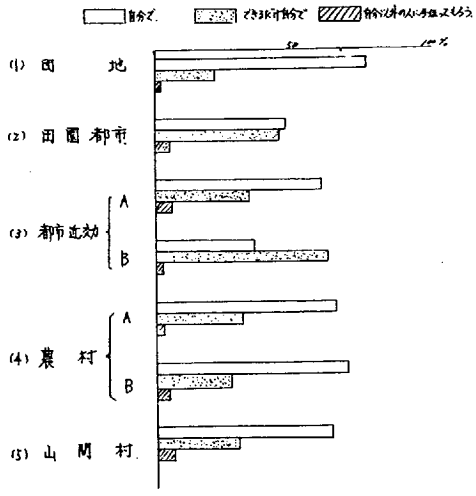
発表論文

1）畠山富而，他
岩手県における児童，生徒の健康問題
学校保健研究　22(11)　507～514
昭和５５年１１月

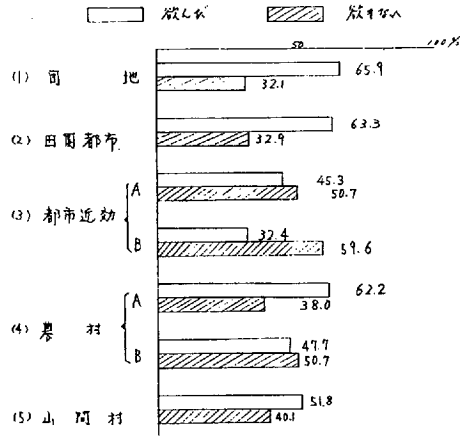
2）畠山富而，実験育児学
公衆衛生　45(6)　41～44．1981年6月

3）畠山富而，実験育児学
メデイサイエンス社，発行1981年９月

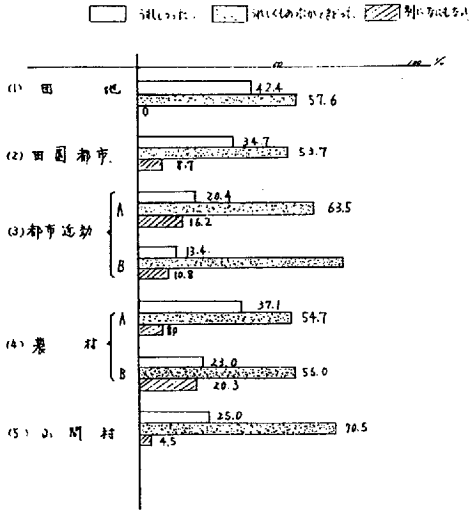
3. あなたは結婚する時，子どもを自分で育てようと思いましたか。



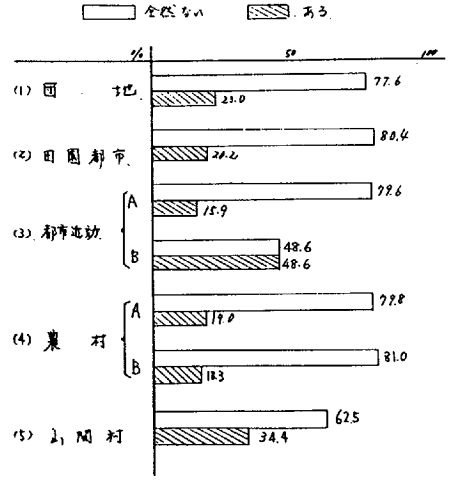
5. あなたは結婚後すぐ子どもを欲しいと望みましたか。



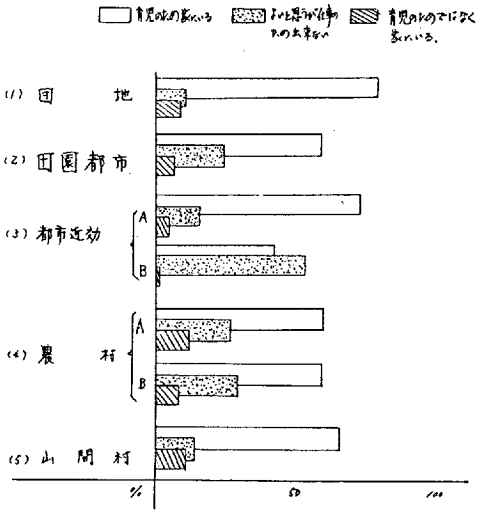
8. あなたは妊娠を知った時どんな気持ちでしたか。



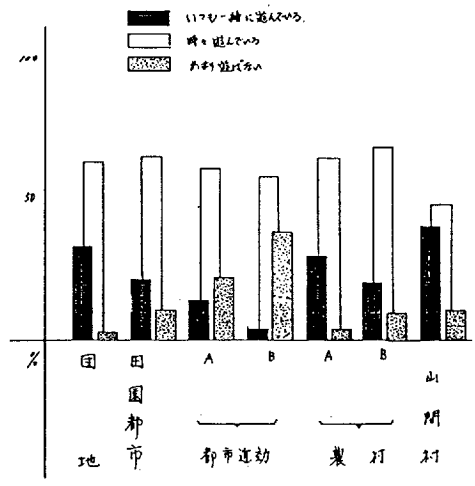
15. あなたは子どもを生まなければよかったと後悔したことがありますか。



17. あなたは母親は育児のため家にいた方がよいと思いますか。



24. あなたは子どもと一緒に遊びますか。(現在)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

実験育児学

仔ザル(カニクイザル)を実験動物として母子早期分離が,種・特異的固定行動型(摂食行動,遊び行動,性行動,養育行動など)に如何なる影響をおよぼすかについて長期的研究を行い,比較動物学的にも,ヒトの母子相互作用の解明への一端を追求している。

現在までの研究結果からの推察では,従来,本能的行動といわれていた種・特異的固定行動型も,単に,生得的(遺伝子)にプログラミングされ,支配されている行動のみでなく,DNA 中に準備され,さらに生後の母子相互作用によるシグナルに基き触発され刻印される行動,母親・仲間を通じての模倣学習により作られる行動の総和によることが明かになってきており,それぞれに cri-tical period の存在することも明かとなった。しかも,この,種・特異的固定行動型の確立は胎児期,生後の乳幼児期早期にあり,脳 DNA の発達,ミエリネーションの発達との相関も推察される結果を得た。

今回は,サルを中心とする“Isolation Monkey”に関する文献的考察を行うと共に,human biology の立場から育児学の理論的確立を目ざして「実験育児学」メデイサイエンス,1981 を出版し,併せて,胎児期・乳幼児期の人生早期の母子相互作用の重要性を指唆した。